向こう三軒両隣 PART2

～新たな「地域づくり」を求めて！～

有識者

藤野（ふじの） 三起子（みきこ）さん

子ども中心の地域づくりに頼りすぎない

子どもが小学生頃までは、やれ育成会だ、やれ子ども会だと子を持つ親の一人として地域の催しにも関わってきました。まさに、子どもを中心に私自身も近所の方々と知り合う機会となり、輪を広げる機会となっていました。その子どもも20歳を過ぎ、日々の仕事に没頭する中、かつて知り合った方々とも疎遠になってしまいました。

隣の空き地に毎日決まってゴミを捨てる人がいます。「そこはゴミを捨てる場所じゃありません。持ち帰ってください。」片付けている不本意さも手伝って、口調もやや冷淡なものだったんだろうと思います。相手も「みんな捨てているじゃないですか」と返してきました。中高生じゃない、見るから30歳前後の成人です。道徳心の欠如やコミュニケーション能力不足など、現在の子どもたちの抱える問題点がよく論じられていますが、全く大人社会でも同様だと思います。むしろ大人の方が深刻です。なぜなら、成長過程であるとか、教育を受ける身という自覚が乏しいし、改善がなかなか期待されないからです。ましてや「勤労やまじめな言動を疎んじる風潮」マスメディアの象徴であるテレビでの「注目されたら成功、受けたら（笑いを取れたら）正解といった風潮」「個人主義の尊重が利己主義にまで陥っている問題」が大人社会でも蔓延しています。

それでは、どこから変えればよいのでしょう。何ができるのでしょう。

大きなことを提案するつもりはありません。ここで述べたいのは、もっと大人自身に、住んでいる地域でのふれあいを豊かにできないかということです。昔から「遠い親戚より、近くの他人」と言われてきました。誰でも日頃の営みの中にあって心のどこかで「より所」「支え合い」を精神的な安定の為に求めていると思います。

空き地の向こう隣のお婆ちゃんは町からの借地を利用して畑を作り、野菜を栽培しています。そのお婆ちゃんは、年に何回か収穫した野菜を近所の方にお裾分けしています。今年も大根、キュウリ、ネギ、サツマイモ、レタス、人参などを戴きました。道路向かいのお爺ちゃんはよく散歩に出かけ、近所のあちこちで話しかけては会話を楽しんでいます。明るい元気な「今日はよい天気ですなぁ」という声に多くの方が励まされていることでしょう。

注目されなくても、正しいことをコツコツ遂行する。地味であるが、確かにその人の行いが地域社会の助けになっている。淡々と、愚直に、という言葉が大切にされる。大切に感じる人の世でありたいと思います。それをまずは２００ｍ四方に住む方々とのふれあいから感じ取れる間柄でありたいです。

新たな「地域づくり」を求めて
平成 18 年度生涯学習まちづくりフォーラム

社会教育委員…学校教育および社会教育の関係者ならびに学識経験のある人から選考され、社会教育に関し、教育長を通して教育委員会に助言を行うため、教育委員会から委嘱された人です。

須恵第三小学校ＰＴＡ会長

浅野（あさの） 雅幸（まさゆき）さん

「校区コミュニティの変化と二匹のネズミ」

「地域を取り巻く環境が激変している。」よく耳にする言葉ですが、いつの時代と比べて激変しているのでしょう。先月と今月では激変しましたか？　去年と今年では？　どちらも体感的に、それほどの変化はありませんよね。でも、たまには違うことがあったり、変化のきっかけがあったりします。

それでは、十年前と今では？　自分が子どもだった頃と今ではどうでしょう？　かなり変化していませんか？　つまり、気がつかないような日々の小さな変化が、十年、二十年と積み重なると、とてつもなく大きな変化になるということです。

環境の変化という言葉を聞くと、数年前にベストセラーになった「チーズはどこに消えた？」という本を思い出します。当時の上司に無理やり読まされた本で、二匹のネズミと二人の小人が同じ環境で暮らしていて、ある日突然環境が激変した時に、何も考えずに走り回った（行動した）ネズミのほうが、なかなか変化に対応しようとしない小人よりも、早くいい思いができるという寓話です。

おそらく私の上司は、「社会の変化にいち早く対応できる営業がいい営業だ」と言いたかったのでしょうが、この二匹のネズミのように何も考えずに行動するのはいかがなものかとも思います。

まあ、賛否両論のある話なので論評は避けますが、変化への対応として、その時にできる最善の手段で素早く対応する方法と、じっくりと状況を分析し、時間をかけて対応する方法の二つがあり、この二つを上手に組み合わせていくことが大切なのでしょう。そしてもう一つ、変化を予期することも大切であると、この本には書かれています。

さて、今の地域コミュニティを取り巻く環境を考えるとどうでしょう。よく聞く話としては、地域の方々が消極的で盛り上がらないとか、いつも決まった人だけがやらされて不公平だ、などという不満もあります。また、本当は参加したいのだけれど、どうしていいか分からないという方も増えてきています。昨年十二月に行なった、第三小学校区の各地域集会でも、不審者情報を回覧版で回していただいていることもあり、地域の多くの方から子どもの安全確保にご協力いただきました。しかし、ここでも何をしていいか分からないという意見が多くありました。

校区コミュニティにおいても、それぞれ発足当時と環境が変わってきているはずです。もちろん、その時どきに最善の方法で素早く変化に対応をしてきたとは思いますが、校区コミュニティ事業も、構想段階から数えて十余年。このあたりで、過去の活動を総括してみてはいかがでしょう。

そして、しっかりと状況を分析し、何が変わって何が変わっていないのか、永続させるためには何が（誰が）必要なのか。

また、今後予期されること、たとえば、団塊の世代の定年や市町村の合併、教育基本法の改正による環境の変化などに、どう対応していくのかなど、時間をかけてじっくり協議する必要があるのではないでしょうか。

まあ、二匹のネズミのように、何も考えずとりあえず何かやってみるという手段もありますが・・・。

平成 13 年にスタートした校区コミュニティまつり